



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語における主語抱合と所属形の接頭辞e-/o-による派生
Author(s)	小林, 美紀; Kobayashi, Miki
Citation	北方言語研究, 15, 165-178
Issue Date	2025-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/112976
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94620
Type	departmental bulletin paper
File Information	09_Kobayashi.pdf



アイヌ語における主語抱合と所属形的接頭辞 e-/o- による派生

小林 美 紀
(国立アイヌ民族博物館)

キーワード：アイヌ語、派生、主語抱合、非対格自動詞

1. はじめに

アイヌ語動詞には、項となる名詞を取り込んでいるものがある。このような現象は一般的に「抱合」と呼ばれる。本稿では、抱合される名詞が主語に相当する場合を取り上げ、先行研究を踏まえたうえで、その構造を整理する。なお、抱合される主語は、1 項動詞の主語の場合と 2 項動詞の主語の場合がある¹。佐藤(2012)では、主語は通常は背景化されにくい要素だが、主語であつても事象全体からみれば背景的な位置付けしか持たない場合は抱合されると指摘している。これに対して、本稿では、動詞の側の性質に着目する。小林(2009)は、所属形的接頭辞 e-/o- による派生は、1 項動詞の場合、非対格自動詞にのみ見られることを指摘した。本稿では、主語抱合によって形成された 1 項動詞について、所属形的接頭辞 e-/o- による派生が起こるかを観察した。そして、この派生が確認されたことにより、主語抱合によって形成された 1 項動詞は、非対格自動詞的な性格を有することを指摘する。これにより、佐藤の指摘する主語の背景化という意味的特徴が、動詞の派生の面から裏付けられることを指摘する。

2. 主語抱合について

アイヌ語では、ある動詞が名詞を抱合した形式であるのかどうか、つまり、一語であるのか、名詞と動詞の二語であるかの区別は、人称接辞の接合のしかたから判断可能である。例えば、包括的 1 人称複数主格は、1 項動詞には=an、2 項動詞には a= という形式がそれぞれ接合する²。例えば、cep koyki 「魚獲りする」という動詞は、cep 「魚」という名詞を koyki 「～を獲る」が抱合した形であるが、この形式には 1 項動詞に接尾する=an が接尾し、cep koyki=an で「私たちが魚獲りをする」という一語になる。それに対し、cep a=koyki では 2 項動詞 koyki に a= が接頭し、「魚を私たちは獲る」という、名詞と動詞からなる二語になる。

アイヌ語動詞は、基本形においては 1 項動詞から 3 項動詞までが確認される。なお、アイヌ語では前述のように、人称によっては 1 項動詞と 2 項動詞で接合する人称接辞の形式が異なるため、その動詞が 1 項動詞か 2 項動詞かは形式上明確に区別できる³。一般的に典型的な他動詞は、目的語をとり、主語から目的語に対して及ぶ動作を表す動詞といわれるが、アイヌ語の場合、後で述べるように 2 項動詞が必ずしもこういった性質をもつ動詞とは限らない。このような事情により、本稿では自動詞主語(S)、他動詞主語(A)のような表示は用いない(グロスを除く)。まず、小林(2016 : 15-20)での考察に基づき、本稿で扱う 1 項動詞、

¹ 本稿では基本的に自動詞、他動詞ではなく、1 項動詞、2 項動詞という用語を用いる。

² 沙流方言の場合。

³ なお、3 項動詞の場合、2 項動詞と同じ形式の人称接辞 a= が接頭する。

2 項動詞について説明する。

1 項動詞は項となる名詞句を 1 つとる動詞である。その項の意味役割は大きく分けて、動作主、対象または空間・場所の 3 種類がある。項となる名詞の文法機能は主語である。文法機能と意味役割の関係を表わすと、1 項動詞は次の 3 通りである⁴。

1 項動詞

主語：動作主 例) apkas 「歩く」、yapkir 「投げる」、suke 「料理する」

主語：対象 例) makke 「開く」、tuy 「切れる」、satke 「乾く」

主語：空間・場所 例) peker 「明るい」、hutne 「狭い」、sep 「広い」

2 項動詞は項となる名詞句を 2 つとる動詞である。その項の意味役割は大きく分けて、1 項動詞同様、動作主、対象、空間・場所の 3 種類である。そして、文法機能と意味役割の関係からすると、2 項動詞は次の 3 通りが確認される⁵。

2 項動詞

主語：動作主 目的語：対象 例) tuye 「～を切る」、nukar 「～を見る」

主語：動作主 目的語：空間・場所 例) kus 「～を通る」

主語：対象 目的語：空間・場所 例) oma 「～にある」

名詞の動詞への抱合については田村(1973)、佐藤(1992)(1997)(2012)、柴谷(1992)、小林(2008)(2024)など複数の先行研究がある。佐藤(2012)は田村(1973)を踏まえたうえで、抱合される名詞の機能から、抱合を大きく 4 つの型に分けている。佐藤(2012: 9-18)であげられている 4 つの型を以下に示す。なお、それぞれの型に佐藤(2012)で示されている例の 1 つをあげる。

I 「主語(自然力)+自動詞」型

例：sir-peker 「景色が・明るくなる(=夜が明ける)」

II 「所有者要求的名詞主語+自動詞」型

例：teke-pase 「手(所属形)(teke)が重い(pase)=年を取って手が不自由になる」

III 「目的語+他動詞」型

例：ni-tuye 「木(ni)を切る(tuye)」

IV 「主語(自然力)+他動詞」型

例：koy-yanke 「波(koy)が上げる(yanke)=～が波によって岸に上がる」

これらの 4 つの型はいずれも動詞の基本形に名詞が 1 つ抱合した形式である。佐藤(2012)はこれらの型の出現率には偏りがあり、抱合の例の多くは III 「目的語+他動詞」型であり、

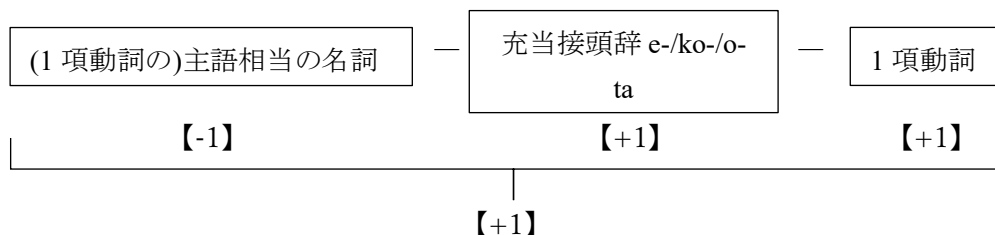
⁴ 1 つの動詞が、2 通り以上の組み合わせをもつこともある。例えば、as 「立つ」は主語として動作主をとる場合と、対象をとる場合がある(小林 2016: 18-19)。

⁵ 1 項動詞同様に 1 つの動詞が、2 通り以上の組み合わせをもつこともある。

それ以外は例が少ないことを指摘している。また、佐藤(2012: 8)は抱合で起こる「昇格(promotion)」についても言及しており、「アイヌ語の抱合における昇格には、他動詞主語の抱合に伴う目的語の主語への昇格と、所有者の主語への昇格とがある」としている。具体例としては、他動詞主語の抱合に伴う目的語の主語への昇格については、「主語(自然力)+他動詞」型の *koy-yanke* 「波(*koy*)が上げる(*yanke*)=〜が波によって岸に上がる」に主格の人称接辞がついた形、*ku-koy-yanke* 「私を(*ku-*)波(*koy*)が上げる(*yanke*)」をあげている。句の場合に目的格の人称接辞 *en-* であらわされる「私を」が、主格の人称接辞 *ku-* に昇格している。所有者の主語への昇格については、「所有者要求的名詞主語+自動詞」型の *teke-pase* 「手(所属形)(*teke*)が重い(*pase*)」に主格の人称接辞がついた形、*teke-pase-an* 「私達が(-*an*)手(所属形)(*teke*)が重い(*pase*)」をあげている。句の場合に所有者の人称接辞 *a-* であらわされる「私達の」が、主格の人称接辞 *-an* に昇格している。

小林(2024)では、より複雑な主語抱合の構造について言及した。具体的には1項動詞に結合価を1つ増やす接頭要素が接頭し、さらに主語相当の名詞が抱合された構造についてである。結合価を1つ増やす接頭要素は、*ta* である場合と充当接頭辞 *e-/ko-/o-* である場合がある⁶。この構造について、小林(2024:226)で示した図を再掲する。

図 1. 1項動詞に+1の接頭要素が接頭し主語相当の名詞が抱合された形



本稿では、動詞に接合する要素について、動詞の結合価を1つ増やすものには【+1】、1つ減らすものには【-1】、増減させないものには【0】という表示を用いる。また、小林(2024)では図1の構造において「昇格」が起こっていることも指摘した。

2.1. 「1項動詞の主語」の抱合

「1項動詞の主語」の抱合は、先にあげた佐藤(2012)および小林(2024)を、あらためて動詞の項数と名詞の概念形/所属形という観点をもとに整理すると、A～Dの4つに分けられる。

アイヌ語の名詞には所属形と概念形という区別がある。所属形はそれが特定の人や物などに所属していることを表し、概念形は単にそのものを概念的に指す。結合価からいえば、所属形は所属先を必要とする【0】の要素である。それに対し、概念形は【-1】の要素である。形のうえでは、所属形は概念形に語尾が付いた形であり、母音で終わる。概念形は母音終わりのものと子音終わりのものがある。例えば、目を意味する語の場合、*sik*「目(概念形)」、

⁶ 小林(2024)では *ta* が場所格助詞の *ta* との関連性が推測される要素であること、動詞中にあらわれる際も、語頭に立つことはないことを指摘した。特に後者のことから、接頭辞であると断定できないため、本稿では-を付けない形で示すこととする。なお、所属形的接頭辞と充当接頭辞の一部は、どちらも *e-* と *o-* という同じ形をしているので、一見すると判別がつきにくく注意が必要である。

sik-i「～の目(所属形短形)」または sik-ihl「～の目(所属形長形)」であるが、sik は子音で終わっているため、概念形であると形の上からも判断される。それに対し、sapa「頭(概念形)」は、所属形「～の頭」も sapa(短形)または sapa-ha(長形)という形であり、概念形と所属形短形が形の上では同一なので、形式上だけでは区別できない。このように形の上から概念形か所属形かが判断できるものとできないものがある。その場合は、意味や結合価を手掛かりに判別することになる。

A. 名詞概念形-1 項動詞

1 項動詞に主語相当の名詞概念形が抱合された形式がある。例として次のようなものがある⁷。

kem-an	[飢饉-ある]	「飢饉になる」
me-an	[寒さ-ある]	「寒い(気温が低い)」
sir-kunne	[あたり-暗い]	「日が暮れる」
sir-uhuy	[あたり-燃える]	「山火事になる」
sir-simoye ⁸	[あたり-動く]	「地震が起こる」

名詞概念形は【-1】の要素であり、この形式の動詞は 0 項動詞である。

B. 名詞所属形-1 項動詞

主語相当の名詞所属形が 1 項動詞に抱合された形式がある。例として次のようなものがある。

paro-ruy	[～の口-激しい]	「～がおしゃべりである」
kewe-ri	[～の体-高い]	「～が背が高い」
nu-retar	[～の顔-白い]	「～が色白である」
moni-pirka	[～の手-よい]	「～が仕事が早い」
sampe-situri ⁹	[～の心臓-伸びる]	「～が気持ちやすっとする」

名詞所属形は、動詞に抱合されても、さらにその所属先が必要となる【0】の要素であり、この形式の動詞は 1 項動詞である。つまり、paroruy を例にすると、ruy「～が激しい」という 1 項動詞に paro「～の口」が抱合されると、「～が」の部分は埋まるが、「～の」という「口」の所属先が必要となるため、paroruy「～の口が激しい(おしゃべりである)」は 1 項動詞である。

⁷ 本稿であげる例は、注記がないものは田村(1996)に記載がある。ただし、語構成及び意味は、出典の記載そのものではなく、それを参考に筆者がつけたものである。

⁸ sir-simoye については、1 項動詞部分の simoye「動く」は、さらに si-moye「自分-～を動かす」という派生を含んでいることも指摘しておく。

⁹ sampe-situri については、1 項動詞部分の situri「伸びる」は、さらに si-turi「自分-～を伸ばす」という派生を含んでいることも指摘しておく。

C. 名詞概念形-充当接頭辞-1 項動詞

1 項動詞に主語相当の名詞概念形が抱合される際に、【+1】の充当接頭辞 ko-/o- が共に接頭する形式がある(前述の図 1 参照)。例として次のようなものがある。

nupe-ko-rapapse	[涙-〜に対して-落ちる]	「〜が涙をこぼす」
ay-ko-cararke	[とげ-〜に対して-たくさん出ている]	「〜がとげだらけである」
inte-o-yan	[目やに-〜に-あがる]	「〜に目やにが出る」

この形式の動詞は 1 項動詞である。なお、佐藤(1997)は sir-peker[あたり-明るい]「夜が明ける」と関連する sirkopeker「夜を明かす」という語をこの構造に相当するものとして取り上げている¹⁰。

D. 名詞概念形-ta-1 項動詞

1 項動詞に【+1】の要素である ta が接合したうえで、名詞概念形が抱合された形式がある(前述の図 1 参照)。この形式の動詞は 1 項動詞である。例として次のようなものがある。なお、ta の意味については、更なる考察が必要であるが、小林(2024)同様にここではひとまず「〜に」としておく。

poppe-ta-asin	[汗-〜に-出る]	「〜が汗をかく」
pa-ta-parse	[湯気-〜に-飛び散る]	「〜から湯気があがる」
nupoppe-ta-rikan ¹¹	[汗-〜に-湿る]	「〜が汗をかく」

A～D で抱合されている主語名詞は、いずれも対象もしくは空間・場所に相当するものであり、動作主に相当するものは確認されない。

2.2. 「2 項動詞の主語」の抱合

田村(1973)ですでに言及があるように「2 項動詞の主語」の抱合もある。2.1 節同様に動詞の項数と名詞の概念形/所属形という観点からいえば、これらは主語相当の名詞概念形が 2 項動詞に抱合された形式である。名詞概念形は【-1】の要素であるので、この形式の動詞は 1 項動詞になる。例として次のようなものがある。

rera-paru	[風-〜をあおぐ]	「〜が風で飛ばされる」
kem-noye	[飢餓-〜をねじる]	「〜が飢え死にする」
sukus-racici	[日ざし-〜を垂れ下げる]	「〜が日に当たってしおれる」
rir-tursere ¹²	[波-〜を落とす]	「〜が波に落とされる」

¹⁰ 佐藤(1997)は ku-sir-ko-peker「私が夜を明かす」という構造について、ku-「私」の昇格が起こっていると説明している。

¹¹ 知里(1975:20)で確認される。

¹² rir-tursere は、2 項動詞部分の turesere「〜を落とす」は、さらに turse-re「落ちる-使役」という派生を含む。

rera-hokuste¹³ [風-～を倒す]

「～が風で倒れる」

これらの例は動作主と対象の 2 つの項をとる動詞であり、動作主にあたる名詞が抱合されている。なお、次のような例もある。

sir-rup-puni [あたり-氷-～を持ち上げる] 「土が霜柱で持ち上がる」

2 項動詞 puni 「～を持ち上げる」に主語(動作主)相当の名詞概念形 rup 「氷」が抱合されたうえで、さらに目的語(対象)である名詞概念形相当要素 sir- 「あたり」が接頭しており、全体としては 0 項動詞である。

下記のように 2 つの項のうち、1 つが空間・場所となる動詞が、主語である対象を抱合する場合もある¹⁴。

mim-us	[肉-～につく]	「～が太る」
ay-osma	[矢-～に入る]	「～に矢が当たる」
urki-o	[シラミ-～に生じる]	「～にシラミがつく」
kem-kus	[血-～を通る]	「～に血が出る」
nupe-ot	[涙-～につく]	「～が涙ぐむ」

2.3. 主語抱合の構造のパターンのまとめ

主語相当の名詞の動詞への抱合について、名詞の役割と動詞の項数からここであらためてその構造のパターンを整理すると表 1 のようになる。

表 1. 主語抱合の構造

	構造	名詞の役割	抱合前の動詞結合価	動詞全体の項数
①	名詞概念形-1 項動詞	1 項動詞の主語	+1	0 項動詞
②	名詞所属形-1 項動詞	1 項動詞の主語	+1	1 項動詞
③	名詞概念形-充当接頭辞-1 項動詞	1 項動詞の主語	+2	1 項動詞
④	名詞概念形-ta-1 項動詞	1 項動詞の主語	+2	1 項動詞
⑤	名詞概念形-2 項動詞	2 項動詞の主語	+2	1 項動詞
⑥	名詞概念形-名詞概念形-2 項動詞	2 項動詞の主語	+2	0 項動詞

んでいる。

¹³ rera-hokuste は、2 項動詞部分の hokuste 「～を倒す」は、さらに hokus-te 「倒れる-使役」という派生を含んでいる。

¹⁴ これらの動詞の基本形も人称接辞の接合のしかたによって、2 項動詞であることが形式上判別できる。佐藤(2012:15)ではこれらを他の典型的な「主語+他動詞」型の抱合の「主語」は、「自然力(natural force)」に類するものであるが、存在他動詞に抱合される名詞はそれらと性質を幾分ことにするものであり、他の「主語+他動詞」型に比べて多めであることから、「目的語+他動詞」の下位分類として扱っている。本稿では主語抱合として捉えられるものとして、この分類に含めておく。

3. 所属形的接頭辞 e-/o- について

「～の頭、～の先端」、「～の尻、～の末端」という意味をそれぞれもつ接頭辞 e-/o- がある。この接頭辞については先行研究の金田一(1960)、田村(1973)、切替(1989)、奥田(1999)、小林(2009)などに言及があり、先行研究ではこの e-/o- という接頭辞は「～の頭、～の先端」「～の尻、～の末端」のように動詞に接頭してもさらにその所属先が必要となるために、動詞全体の項数は変化しないとの指摘がある。例えば、1 項動詞に e- が接頭した場合、「～が」の部分は埋めるが、同時に「～の頭が」のように「～の」の部分が必要となる。名詞所属形のように、所属先が必要となるという点から本稿では「所属形的接頭辞」と呼ぶ。

自動詞には非能格自動詞と非対格自動詞の 2 種類あることが知られているが、小林(2009:6-16)では、下記の例をあげながら、1 項動詞に所属形的接頭辞 e-/o- が接頭する場合、「その接頭先となる基本形は対象を主語とする非対格動詞」であり、「動作主を主語とする非能格動詞に接頭する例は確認できない」という指摘を行った。

e-kapke ¹⁵	[～の頭-ぺちゃんこである]	「～の上部がぺちゃんこである」
e-meske	[～の頭-もげる]	「～の上部が欠けている」
e-kay ¹⁶	[～の頭-折れる]	「～の先端が折れている」
e-en	[～の頭-尖る]	「～の先端が尖っている」
e-horak	[～の頭-倒れる]	「～が傾いている」
o-hewke	[～の尻-傾く]	「～が傾いている」
o-asin	[～の尻-出る]	「～が抜ける」
o-uhuy	[～の尻-燃える]	「～の末端が焦げている」
o-peratne	[～の尻-ばらばらである]	「～の末端がばらばらである」

4. 主語を抱合して形成された 1 項動詞と所属形的接頭辞 e-/o- による派生

ここでは 2 節でみてきた主語抱合のうち、主語を抱合して形成された 1 項動詞をとりあげ、それらの所属形的接頭辞 e-/o- による派生について考察する。2.3 節の表 1. 「主語抱合の構造」で示した 6 つのパターンのうち、主語を抱合して形成された 1 項動詞は、②から⑤の 4 パターンである。

4.1. 「名詞所属形-1 項動詞」からの派生

主語相当の名詞の所属形が 1 項動詞に抱合された形式に、さらに所属形的接頭辞 e-/o- が接頭していると考えられる例が、田村(1996)では 3 例確認された¹⁷。この形式の動詞は 1 項動詞である。

o-paro-ruy	[～の尻-～の口-激しい]	「～がおしゃべりである」
o-ipe-an	[～の尻-～の中身-ある]	「～が多い」

¹⁵ 久保寺(1977:157)で確認される。

¹⁶ 久保寺(1977:325)で確認される。

¹⁷ 4 節では基本的に田村(1996)から例を収集した。

o-ipe-isam [～の尻-～の中身-ない] 「～が少ない」

いずれも、動詞全体の意味が構成要素からは把握しにくい面はあるが、結合価の面から上記の構成をなしていると考えられる。

3 例しか確認できなかった理由として、佐藤(2012:9-10)で「所有者要求的名詞主語＋自動詞」型の抱合は数が少ないと指摘されているように、派生前の形の数がまず少ないことが前提としてあげられる。詳細については今後の考察を要する。

4.2. 「名詞概念形-充当接頭辞-1 項動詞」からの派生

1 項動詞に【+1】の要素である充当接頭辞が接頭したうえで、主語相当の名詞概念形が抱合された形式に、さらに所属形的接頭辞 e-/o- が接頭していると考えられる例が、田村(1996)では 1 例確認された。

e-pe-ko-cirir [～の頭-水分-～に対して-ポタポタ滴る] 「～が濡れる」

「名詞概念形-充当接頭辞-1 項動詞」については、小林(2024)で数がごくわずかであると指摘した。1 例しか確認できなかった理由として、派生前の形の数が少ないことが前提としてあげられる。

4.3. 「名詞概念形-ta-1 項動詞」からの派生

1 項動詞に【+1】の要素である ta が接合し、主語相当の名詞の概念形が抱合された形式に、さらに所属形的接頭辞 e-/o- が接頭する場合がある。この形式の動詞は 1 項動詞である。例として次のようなものがある。

e-kem-ta-nayne	[～の上端-血-～に-流れる]	「～の上端から血が流れる」
e-non-ta-carse	[～の上端-つば-～に-飛び散る]	「～の上端からつばが飛び散る」
e-non-ta-pus	[～の上端-つば-～に-飛ぶ]	「～の上端からつばが飛ぶ」
e-rat-ta-cik ¹⁸	[～の上端-粘液-～に-滴る]	「～の上端からよだれが滴る」
o-sum-ta-cik ¹⁹	[～の末端-油脂-～に-滴る]	「～の末端から油脂が垂れる」
o-sum-ta-pes ²⁰	[～の末端-油脂-～に-伝って滴る]	「～の末端から油脂が垂れる」
o-kem-ta-nayne	[～の末端-血-～に-流れる]	「～の末端から血が流れる」

なお、「名詞概念形-ta-1 項動詞」という形式においては、派生前の形よりも、上記のように所属形的接頭辞 e-/o- が接頭する形のほうが、より多く観察されたことも指摘しておくが、なぜこのような現象が起こるのかは今後の考察を要する。

¹⁸ 知里(1975:265)で確認される。

¹⁹ 中川(1995:118)で確認される。

²⁰ 中川(1995:118)で確認される。

4.4. 「名詞概念形-2 項動詞」からの派生

主語相当の名詞概念形が 2 項動詞に抱合された形式に、さらに所属形的接頭辞 e-/o- が接頭する場合がある。この形式の動詞は 1 項動詞である。例として次のようなものがある。

e-rat-kus	[～の上端-粘液-～を通る]	「～がよだれを垂らす」
e-ci-w-kururu	[～の上端-流れ-～を揺らす]	「～が流れに揺れる」
o-sir-tesu	[～の末端-あたり-～を反らす]	「～がつるっと滑る」
o-maw-suye	[～の末端-風-～を揺らす]	「～の末端が風で揺れる」
o-pe-kus	[～の末端-水分-～を通る]	「～が漏る」

4.5. 所属形的接頭辞 e-/o- による派生

主語を抱合して形成された 1 項動詞は、「名詞所属形-1 項動詞」(表 1.②)、「名詞概念形-充当接頭辞-1 項動詞」(表 1.③)、「名詞概念形-ta-1 項動詞」(表 1.④)、「名詞概念形-2 項動詞」(表 1.⑤)の 4 パターンの構造がある。確認される数が 1 例しかないパターンがあるものの、すべてのパターンに所属形的接頭辞による派生が確認された。

先述のように、1 項動詞に所属形的接頭辞 e-/o- が接頭する場合について、小林(2009:6-16)では、動作主を主語とする非能格動詞に接頭する例は確認できず、「その接頭先となる基本形は対象を主語とする非対格動詞」であるという指摘を行った。主語を抱合して形成された 1 項動詞には、所属形的接頭辞 e-/o- が接頭することから、これらも非対格自動詞の性格を有していることをここでは指摘する。

5. 非対格自動詞の性格と背景化

自動詞には非能格自動詞と非対格自動詞の 2 種類があることが知られている。「意図的動作を行う動作主(Agent)を主語にとる動詞」が非能格自動詞、「意図を持たずに受動的に事象に関わる対象(Theme)を主語にとる動詞」が非対格自動詞であると説明されている(影山 1993:43)。主語を抱合して形成された 1 項動詞には、所属形的接頭辞 e-/o- が接頭することから、これらの 1 項動詞は、非対格自動詞の性格を有していると考えられる。つまり、これらの 1 項動詞は、「意図を持たずに受動的に事象に関わる対象(Theme)を主語にとる動詞」ということになる。

主語抱合について、佐藤(2012)では「背景化」という用語を用いて次のような説明をしている。「自動詞主語は通常は抱合されないが、主語が漠然とした周囲状況を意味する自然力である場合か、身体部位を意味する名詞の場合に限って抱合されることがわかる。また、他動詞主語の抱合も、やはり漠然とした周囲状況を意味する自然力であればごくまれにはあるが許される。抱合は自立的な要素を、語の非自立的な内部構成要素とするプロセスであるから、当該名詞の背景化に寄与するものであると言える。自然力は、概略、漠然とした周囲状況を意味するものであるから、事象の背後にあるものとして背景化のプロセス(すなわち抱合)を受けやすいと考えられる。また、身体部位名詞の場合は、所有者の方が重要度が高いと考えられやすく、そのため、身体部位名詞は背景化を受けやすい(すなわち抱合されやすい)のだと考えられる。主語は発話における一般的重要性から考えて通常は背景化され

にくい要素と考えられるが、主語であっても事象全体からみれば背景的な位置付けしか持たない場合は抱合されるのである。これが通常は不可能と考えられる主語抱合のうち、自然力と身体部位が例外的に許される理由であろう」(佐藤 2012: 20-21)。

主語を抱合して形成された 1 項動詞が、「意図を持たずに受動的に事象に関わる対象(Theme)を主語にとる動詞」であることと、佐藤(2012)での「背景化」の指摘は関連していると考えられる。

まず、2 項動詞(佐藤(2012)の用語では他動詞)の主語の抱合についてとりあげる。rera-paru [風-~をあおぐ]「~が風で飛ばされる」という語を例に考える。この動詞は、2 項動詞 paru 「~をあおぐ」に主語の rera「風」が抱合された形である。paru は有対動詞であり、対応する 1 項動詞 parse「~が宙を舞う、~が飛び散る」がある²¹。(1)の例文が確認される。なお、意味役割と文法機能も表示する。

(1)		konam	parse.		
		木の葉	飛ぶ	木の葉が飛ぶ	[萱野 2002: 378]
	意味役割	対象			
	文法機能	主語			

この状況を 2 項動詞 paru「~をあおぐ」を用いて表現するとき、主語が 1 人称単数であれば、(2)のようになる²²。rera「風」が主語であれば、(3)のようになる。また、主語を抱合した動詞では(4)のようになる((2)~(4)は筆者の作例)²³。意味役割と格、文法機能も表示する。

(2)		konam	ku=	paru	
		木の葉	1A.SG=	~をあおぐ	私が木の葉を飛ばした。
	意味役割	対象	動作主		
	格		主格		
	文法機能	目的語	主語		

²¹ 有対動詞とは、自動詞と他動詞の対応のある動詞である。早津(1989: 231)では「日本語の他動詞は、対応する自動詞があるか否かという点で二つの類に分けられる」とし、「倒す」や「曲げる」のように、対応する自動詞(「倒れる」や「曲がる」)のあるものを「有対他動詞」、「たたく」や「読む」のように、対応する自動詞のないものを「無対他動詞」と呼んでいる。他動詞と自動詞の対応については「本稿では他動詞と自動詞の間に形態的・意味的・統語的な対応が成り立つ場合にのみ、その他動詞と自動詞とが対応するとみなす。(引用者中略)「統語的な対応」とは次のような関係すなわち、他動詞文の目的語が、(形態的・意味的に対応する自動詞による)自動詞文の主語である関係をいう」(早津 1989: 231)としている。

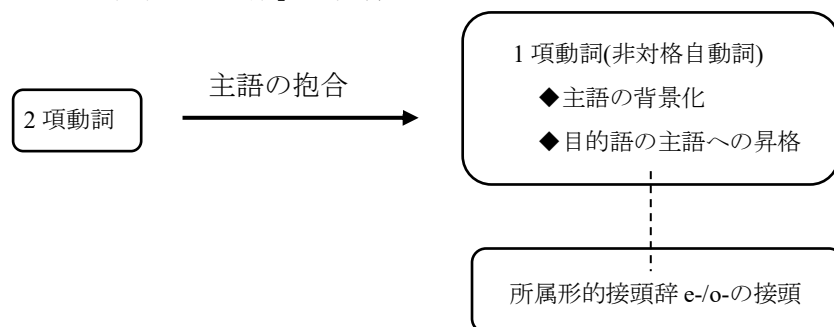
²² paru について田村(1996: 513)では、「独立には未出。複数形 parpa パラパ、重複形 paruparu パルパル の形で出てきた。一回だけあおぐということはめったにないために出にくいのであろう。」としている。ここでは対比のため、reraparu と同じ paru という形を用いて作例した。

²³ (2)~(4)に完全に一致する用例が確認できなかったため、説明のために作例を用いたが、(2)に近いものとして ape ku=parpa「火を私があおぐ」という表現を含む用例が確認できる(田村 1996:512)。また、(3)に近いものとして、usa niham ahup wa rera parparu p ne kusu「木の葉だのが入り込んで、風にあおられているので」という部分を含む用例が確認できる(中川 1995:326)。(4)が名詞を抱合しているかどうかは、3 人称であるこの文の形の上からは判断できないが、(1)との比較のため 3 人称の文を作例し、ここで起こる現象を説明する。

- (3)
- | | | | | | |
|------|------|-------|--|-------|-------------|
| | rera | konam | | paru. | |
| | 風 | 木の葉 | | ～をあおぐ | 風が木の葉を飛ばした。 |
| 意味役割 | 動作主 | 対象 | | | |
| 文法機能 | 主語 | 目的語 | | | |
- (4)
- | | | | | | |
|------|-------|------|---|-------|--------------|
| | konam | rera | - | paru. | |
| | 木の葉 | 風 | - | ～をあおぐ | 木の葉が風で飛ばされた。 |
| 意味役割 | 対象 | 動作主 | | | |
| 文法機能 | 主語 | | | | |

最初の例(1)parse「飛ぶ」は非対格自動詞であり、主語である konam「木の葉」は対象の意味役割をもっている。それに対し、paru「～をあおぐ」という 2 項動詞の文中にあらわれる (2)(3)の際には、konam「木の葉」は同じく対象ではあるが、目的語である。主語抱合の例である(4)では、(1)と同じく主語となっている。つまり、(3)では主語である動作主(自然力)の rera「風」が抱合されて、(4)では背景化され、対象である konam「木の葉」が主語に昇格したわけである。結果として「意図を持たずに受動的に事象に関わる対象(Theme)を主語にとる動詞」である reraparu「～が風で飛ばされる」が形成された。つまり、対象が主語になるという点で、非対格自動詞と「2 項動詞の主語を抱合してできた 1 項動詞」は共通している。以上の過程を図示すると、下記の図 2 のようになる。

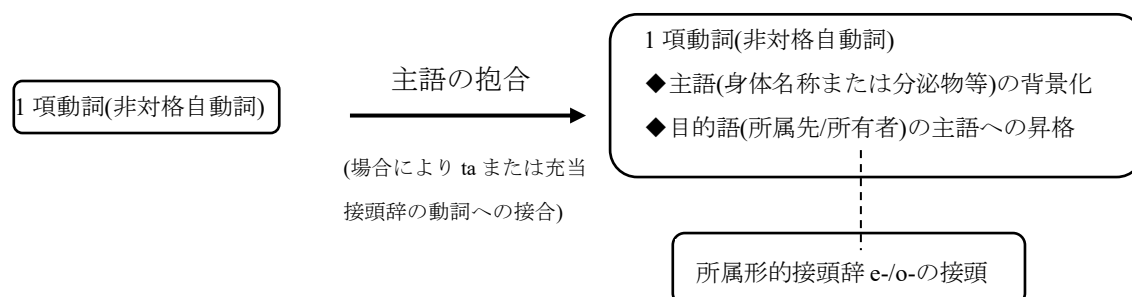
図 2. 「2 項動詞の主語」の抱合



次に「1 項動詞の主語」の抱合について考える。小林(2024:227-228)では、小林(2008)を踏まえ名詞が抱合される際の動詞の性質について、本稿の「名詞所属形-1 項動詞」(表 1.②)、「名詞概念形-充当接頭辞-1 項動詞」(表 1.③)、「名詞概念形-ta-1 項動詞」(表 1.④)に相当するものに関して、いずれも抱合前の 1 項動詞は非対格自動詞であることを指摘した。また、「名詞概念形-充当接頭辞-1 項動詞」と「名詞概念形-ta-1 項動詞」について、抱合される名詞は 1 項動詞に取り込まれる構造全体の「主語から生じる分泌物あるいはそれに近いもの」という傾向があることを述べた。この点からは「1 項動詞の主語」の抱合においては、抱合された名詞は、いずれも主語となる名詞の部分あるいは分泌物であり、「1 項動詞の主語」

を抱合して形成された 1 項動詞は、もともとの動詞の性質を維持していると考えることができそうである。まとめると図 3 のようになる。

図 3. 「1 項動詞の主語 (身体名称あるいは分泌物等) 」の抱合



ただし、「名詞概念形-充当接頭辞-1 項動詞」については、2.1.節で触れたように、*sir-ko-peker*「あたり-に対して-明るい」「夜明かしする」のように、佐藤 (2012) でいう自然力が主語として抱合されている例もあり、これについては同じ枠組みで説明することができない。意味的にも「夜明かしする」が意図を持たずに受動的に事象に関わる対象(Theme)を主語にとる動詞とは言えないだろう。*peker*「明るい」は非対格自動詞であり、付加詞を取り込む充当接頭辞 *ko-*の接頭によって非能格自動詞的な性質をもつものへと変わるとは考えにくく、特殊な例であるといえる。「名詞概念形-充当接頭辞-1 項動詞」において、自然力が抱合される場合については例外となるが、なぜ例外となるかについての分析は今後の課題である。

6. まとめ

主語を抱合して形成された 1 項動詞は、「名詞所属形-1 項動詞」(表 1.②)、「名詞概念形-充当接頭辞-1 項動詞」(表 1.③)、「名詞概念形-*ta*-1 項動詞」(表 1.④)、「名詞概念形-2 項動詞」(表 1.⑤)の 4 パターンの構造がある。佐藤(2012)では主語は通常は背景化されにくい要素だが、主語であっても事象全体からみれば背景的な位置付けしか持たない場合は抱合されるとの指摘がある。

主語を抱合して形成された 1 項動詞の 4 つの構造では、所属形的接頭辞 *e-/o-*による派生が確認される。所属形的接頭辞 *e-/o-*は非対格自動詞に接頭する傾向があることから、これらの動詞は、非対格自動詞的性格を有しており、「意図を持たずに受動的に事象に関わる対象(Theme)を主語にとる動詞」ということになる。つまり、もともとの主語が背景化されていることが動詞の側の派生でも裏付けられたといえる。なお、「名詞概念形-充当接頭辞-1 項動詞」において、自然力が抱合される場合については例外となるが、この点についての分析は今後の課題である。

略語

1：人称，＝：人称接辞境界，A：他動詞主語，SG：単数

参考文献・ウェブサイト

- 奥田統己編(1999)『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集(CD-ROM つき)』札幌：札幌学院大学。
萱野茂(2002)『萱野茂のアイヌ語辞典（増補版）』東京：三省堂。
影山太郎(1993)『文法と語形成』東京：ひつじ書房。
切替英雄(1989)「『アイヌ神謡集』辞典」『北大言語学研究報告』2。
金田一京助(1960)「アイヌ語学講義」『アイヌ語研究 金田一京助選集』1. 三省堂。(金田一京助全集』5,三省堂, 1993 年所収)
久保寺逸彦(1977)『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』東京：岩波書店。
小林美紀(2008)「アイヌ語の名詞抱合」『千葉大学 人文社会科学研究』17：199-214。
———(2009)「アイヌ語の接頭辞 e- と o- に関する考察」『ユーラシア諸言語の動詞論(5) 人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』189：1-17。
———(2016)『アイヌ語動詞の結合価と項構造』2015 年度千葉大学大学院博士論文
———(2024)「アイヌ語動詞にあらわれる ta と充当接頭辞について」『北方言語研究』14：219-231。
佐藤知己(1992)「抱合」からみた北方の諸言語」宮岡伯人(編)『北の言語：類型と歴史』191-201. 東京：三省堂。
———(1997)「アイヌ語の特徴と現状」『北方民族博物館友の会季刊誌 Arctic Circle』22 (<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tugusk/a02/bunka/sato.html> 参照) [2025 年 1 月アクセス]
———(2012)「アイヌ語千歳方言における抱合の種類とその諸制約」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』18：1-32。
柴谷方良(1992)「アイヌ語の抱合と語形成理論」宮岡伯人(編)『北の言語：類型と歴史』203-222. 東京：三省堂。
田村すず子(1973)「アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造」『アジア・アフリカ文法研究』2.(ゆまに書房編集部編『アイヌ語考』4, ゆまに書房, 99-120, 2001 年所収)
———編(1984)『アイヌ語音声資料』1. 東京：早稲田語学教育研究所。
———編(1985)『アイヌ語音声資料』2. 東京：早稲田語学教育研究所。
———編(1988)『アイヌ語音声資料』5. 東京：早稲田語学教育研究所。
———(1996)『アイヌ語沙流方言辞典』東京：草風館。
知里真志保(1975)『知里真志保著作集別巻Ⅱ分類アイヌ語辞典人間編』東京：平凡社。
中川裕(1995)『アイヌ語千歳方言辞典』東京：草風館。
早津恵美子(1989)「有対他動詞と無対他動詞の違いについて一意味的な特徴を中心に一」『言語研究』95.231-256。

Subject Incorporation and Derivation by the Affricative Prefix e-/o- in Ainu

Miki KOBAYASHI
(National Ainu Museum)

Keywords: Ainu language, derivation, subject Incorporation, unaccusative verb

Some Ainu verbs incorporate nouns that function as arguments. This phenomenon is known as “incorporation,” and this study focuses on subject incorporation. Sato (2012) noted that the subject is typically an element that is difficult to incorporate, but it can be included if it occupies only a background position in relation to the event as a whole. I examine the derivation by the prefix e-/o-. This has the same function as the affiliation form. I point out that intransitive verbs formed by subject incorporation have the property of unaccusative verbs and that the backgrounding of the original subject is confirmed in terms of derivation.

(こばやし・みき kobayasmiki@gmail.com)